

Update

～若者のチカラで岩手をアップデートする～

2015 庁内若手職員による若者施策研究会 [第3期若手ゼミ]

最終報告書

2016. 1. 29



目次

I	はじめに	1
II	研究プロセス	2
III	7つのプロジェクト	6
III - 1	人口減少問題対策	7
1	“きっかけ種まき”プロジェクト	8
2	“まるっとキャンパス”プロジェクト	10
3	“いわてワーホリ”プロジェクト	12
4	“Iwate × Connect”プロジェクト	14
III - 2	若者活躍促進	17
1	“若者アクションパートナー（若者AP） × 若者交流ポータルサイトUpdate”プロジェクト	18
2	“若者チャンネル × たまり場”プロジェクト	20
3	“SUPER若者文化祭”プロジェクト	22
IV	おわりに	24
V	活動の記録	25
1	検討のあゆみ	25
2	取材先の記録	27
3	参加イベント	34
4	若手ゼミ設置要領	35
5	若手ゼミメンバー	36



I はじめに

岩手県の「庁内若手職員による若者施策研究会」（以下、「若手ゼミ」という。）は、平成25年度の発足から今年度で第3期目を迎えました。私たち第3期の若手ゼミ生19名は、平成27年5月29日に部局の枠を越えて集結し、先輩若手ゼミ生が試行錯誤しながら考案したプロジェクトへの熱意を受け継ぎ、目的と意欲を共有し、研究活動を展開してきました。

【 Update ～ 若者のチカラで岩手をアップデートする ～ 】

これは、研究活動を進めるにあたって私たちが決めた第3期若手ゼミのテーマです。未来に向かって、今の岩手を「若者が生きやすい岩手」にアップデートすることを目的とし、そのためには若者自身のチカラを形に変えることが必要だと捉えたものです。このイメージを具体的な取組として県の施策に反映させるため、私たちは「人口減少問題対策」と「若者活躍促進」の2つの側面からアプローチすることにしました。

この2つの側面に沿った研究テーマごとに4つのチームに分かれて活動を展開し、最終的な研究成果として、7つのプロジェクトを提案するに至りました。その検討過程において、施策を立案する困難さに直面しながら、アイデアをブラッシュアップするために活発な議論を重ねたり、県内各方面で活躍する方々にインタビュー取材をするとともに、県庁内の関係担当室課への協議や事業化に向けた提案を行うなど、私たち自身にとって貴重な経験となりました。

ここで紹介する各プロジェクトは、私たちの研究活動の成果ではありますが、特命業務として活動の機会を与えていただいたことや、取材先の方々及び関係者のご協力があったことで芽生えたものです。第3期若手ゼミ生一同、改めて感謝申し上げますとともに、「若者」が「岩手」を「Update」する瞬間の共有を楽しみにしております。

1 研究テーマの選定

私たちゼミ生は、各自の関心ある施策、各部局から提案があった「若手ゼミで取り上げてほしい内容」等を参考に、各自が取り組んでみたいテーマを発表し合い、研究テーマの選定とグループ分けを検討するところから始まりました。

ゼミ生各自が発表したテーマとして、「他者との関係による承認欲求」「経済的欲求」「共働き世帯のワークライフバランス」「中山間地域の活用」「コミュニティカフェ」「(若者世代への)情報発信」など、様々な意見が出され、それら発表されたテーマをもとに、より具体的な「解決すべき課題」や「あるべき姿」を洗い出しながら議論を進めた結果、大きく2つのテーマ「人口減少問題対策」と「若者活躍促進」について検討を行うことになりました。

2 各プロジェクトの背景

方向性について大きく2つのテーマが見えてきたところで、「人口減少問題対策」については、それぞれ別の切り口から検討する3つのグループと、「若者活躍促進」については、評論家の宇野常寛氏の知見を得ながら研究するグループができあがりました。

(1) 人口減少問題対策に関するプロジェクト

まずは、人口減少問題対策について、県外から岩手に人を呼び込むことで、交流人口、定住人口増加につながる機会の創出を目指した3つのチーム「きっかけ種まきチーム」「まるっと岩手チーム」「Team×Connect」の4つのプロジェクトについて、検討に至った経緯を紹介します。

① きっかけ種まきプロジェクト（きっかけ種まきチーム）

きっかけ種まきプロジェクトは、岩手に知り合いがいることが、行動のきっかけとなり、交流人口や定住人口の増加につながるのではないかと考えたところからスタートしました。その背景として、若者は他の世代に比べて、「SNSのきっかけが実際の行動に結びつきやすい」傾向が強く、情報過多により自身で選別が難しい時代において、ある程度目利きして、後押ししてほしいニーズがあるということが分かりました。

また、地域ブランド（都道府県）の認知度が本県は全国20番台にとどまっていることから、本県の魅力に関する情報発信を強化し、県外における本県の認知度を高める必要があるとも感じました。

そこで、現代の若者の特性を踏まえ、SNSを活用して県内の若者が等身大の視点から岩手らしい日常を発信し、県内外の若者を緩やかかつ長期的に結びつけ、行動のきっかけとなる種をまくことが有効と考え、このプロジェクトを検討しました。

② まるっとキャンパスプロジェクト（まるっと岩手チーム）

まるっとキャンパスプロジェクトは、出張用務の際に広大な県内を移動することの大変さを実感し、何か移動自体を楽しめるものがあつたらいいな、という考えからスタートしました。

まず、移動が大変だということについて、統計に表れていないか調べてみると、県内市町村別の観光客入込数が、沿岸・県北地域は内陸部の約2分の1であり、また、仙台河川国道事務所が公表している都市間所要時間図によると、三陸地域は内陸部に比べ、移動距離に対する所要時間が非常に長くなることがわかりました。

そこで、インフラ整備以外の手法により移動そのものを楽しくすることで、体感の移動時間を減らし、沿岸・県北エリアへの交流人口増加に資することはできないかと考え、このプロジェクトを検討しました。

③ いわてワーホリプロジェクト（まるっと岩手チーム）

いわてワーホリプロジェクトは、人口減少に歯止めをかけ、岩手に人の流れを創り出すためには、移住の前段階として「岩手に来てみる」という交流機会を促し、「岩手リピーター」を獲得することが必要であるという仮説からスタートしました。

また、内閣官房「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」によると、都会生活から地方暮らしに憧れを持つ若い世代が増加しているという結果が示されていたことから、地方移住を希望する首都圏在住者を本県に呼び込むための方策として、都会では体験できない農山漁村での仕事や伝統工芸等岩手ならではの仕事を通して、「稼ぎ」ながら岩手での暮らしを体験するワーキングホリデーを実施することはできないかと考え、このプロジェクトを検討しました。

④ Iwate × Connectプロジェクト（Team×Connect）

Iwate × Connectプロジェクトは、岩手県の人口が130万人を下回り、人口減少に歯止めをかけることが急務であるとの考えからスタートしました。

内閣府の実施した「農村漁村に関する世論調査」では、首都圏には地方への移住を検討している人が3割以上いるという結果が報告されています。

一方で、県内市町村の移住・定住担当者にアンケートをしたところ、移住に係る相談件数は年間500件程あるが、人員、ノウハウの不足により移住・定住に繋げることが十分に出来ていない状況でした。更には、空き家の老朽化対策が各自治体の課題となっていることに着目し、移住希望者へ空き家を安価に斡旋することで、両方の課題解決を推し進める施策とすることができるのではないかと考え、このプロジェクトを検討しました。

(2) 若者活躍促進に関するプロジェクト

次に、若者活躍促進に関する「Team Planets」の3つのプロジェクトについて、検討に至った経緯を紹介します。

- ① 若者アクションパートナー（若者AP） × 若者交流ポータルサイトUpdateプロジェクト
- ② 若者チャンネル × たまり場プロジェクト
- ③ SUPER若者文化祭プロジェクト

若者活躍促進の施策を検討するにあたり、岩手に住んでいる若者にも住んでいない若者にも、岩手に共感を持って欲しい、若者同士でどんどん繋がって欲しい、という共通の思いがありました。

そして、現代社会・文化分野における新進気鋭の若手評論家である宇野常寛氏は、その思いに通じる斬新かつ魅力的なシナリオを書籍やメディア等で表現しており、若者活躍促進に通じる宇野氏のビジョンに心を動かされた若手ゼミメンバーが、「若者文化の力で若者が住みやすい岩手を創ろう」と、Team Planetsを結成しました。

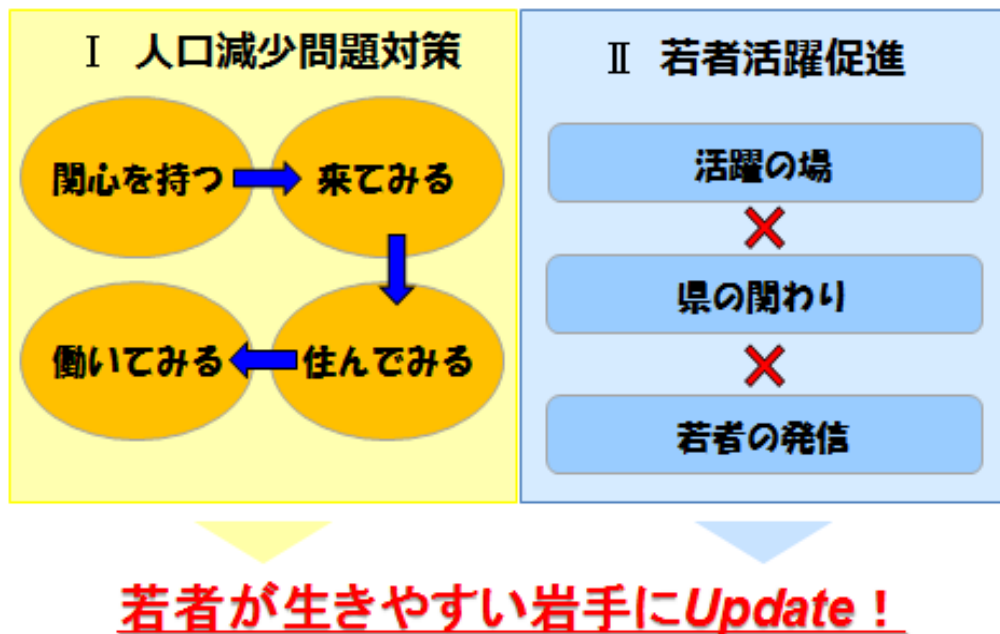
宇野氏から多くの知見を頂きながら、地域の若者へのインタビュー取材を通じて、岩手でも同世代の仲間が、活動を行いながら地域にコミット※し、地域を変えつつあることを知り、彼ら一人ひとりの力を繋げることが、「若者が住みたくなる岩手」を実現する力となると確信しました。

そこで、活動する若者が交流・情報発信しながら、同世代の仲間とどんどん繋がっていくためのストーリーを「『コミットしたくなる岩手』にUpdate」と表現し、この思いを実現させるべく、3つのプロジェクトを検討するに至りました。

※「コミット」：自ら意志を持って、参加し、関わり合っている状態。

これらのプロジェクトにより、人口減少問題対策については、4つの段階的なアプローチで岩手に“関心を持ち”“来て”“住んで”“働いて”やがて定住に至るまでを支援する施策として、また、若者活躍促進については、3つの要素が絡み合うことで、より若者が生きやすい岩手へUpdateします。

2つの側面からアプローチ！



2

3 検討とブラッシュアップ

私たちの検討した7つのプロジェクトについては、若手ゼミ設置要領にあるように、若手職員の感性を活かし、「若者が主役になって躍動するいわて」の実現に向けた施策について部局横断で研究活動を行い、県の施策展開に資することを理念とし、検討を行ってきましたが、各部局への事業提案を行うなかでは、従来の政策体系に落とし込んだときに期待される効果、県が実施する理由など、検討が不十分な点について、様々ご指摘をいただきました。

これらについて、今もって十分に述べられているとは言い難いかもしれませんが、私たちゼミ生が真摯に向き合い、検討した各プロジェクトについて次章より報告いたします。



Ⅲ 7つのプロジェクト

Ⅲ - 1	人口減少問題対策	7
1	“きっかけ種まき”プロジェクト	8
2	“まるっとキャンバス”プロジェクト	10
3	“いわてワーホリ”プロジェクト	12
4	“Iwate × Connect”プロジェクト	14

Ⅲ - 1 人口減少問題対策

【背景】

「いわて統計白書2015」では、岩手県の人口は現状として、1997年以降減少し続けており、2014年の岩手県の人口は128万人です。また**生産年齢人口は、ピークであった1985年と比べると21万人以上減少**しています。

生産年齢人口の減少



- 各種サービス産業の撤退や減少
- 生活利便性が低下

社会システムの維持・存続や県民の生活に影響を及ぼす可能性

本県の人口減少の原因は「自然減」と「社会減」の両方が相まって減少するという本格的な人口減少期に入っています。

そこで、岩手県では「岩手県ふるさと振興総合戦略」を策定しました。これは岩手県人口ビジョンを踏まえて、ふるさとの振興を図り、人口減少に立ち向かうための基本目標を定めたものです。岩手県の重要課題として総力を上げて取り組む必要があります。

【課題意識】

- ・ 若年層の**いわてファン**の更なる拡大
- ・ 若者が働きやすく、住みやすい**環境の整備**
- ・ 県外への流出を抑え、**自己実現の場の提供**
- ・ 移住希望者の**多様なニーズへの支援**



【取組の方向性】

岩手に魅力を感じ、行ってみたい、住みたい、働きたいという人々を**後押しし、岩手の定住人口増へと繋げるもの。**

1 “きっかけ種まき” プロジェクト

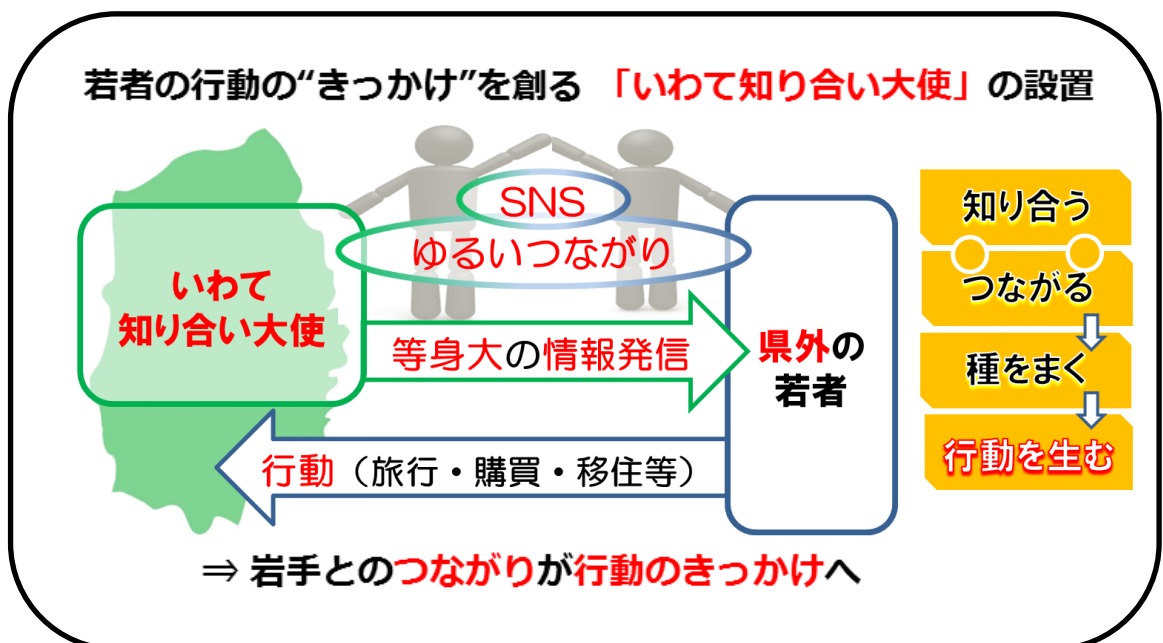
(1) 目的

- ① SNSのきっかけが実際の行動に結びつきやすい現代の若者の特性を踏まえ SNSの活用により県内外の若者を緩やかかつ長期的に結びつける。
 - ② SNSにより県外の若者へ等身大の岩手を発信し、岩手に対する行動のきっかけとなる種をまき、将来的な定住・交流人口の増加及び県産品の購買促進につなげる。
- ☞ 若者は他の世代に比べ、SNSが行動のきっかけとなりやすい
→ SNSで「ゆるいつながり」をつくる

(2) 事業提案内容

「いわて知り合い大使」の設置により県内外の若者とのつながりを創る。

- ① 大使の任命
岩手らしさを発信できる県内の様々な立場・職種の若者を「いわて知り合い大使」に任命する。
(例：牛飼い女子、狩りガール、南部杜氏、県外からの移住者)
- ② SNSによる岩手県の情報発信
「いわて知り合い大使」は、県外の人から見ると「普通の暮らし」が岩手らしく感じられる自らの生活（日常・余暇）や仕事などを切り口に、等身大の視点から岩手の情報を発信し、SNSによる緩やかな日常的交流を行う。
- ③ 県内外の若者の交流会の実施
大使間の相互交流や、県外の若者（フォロワー）による来県ツアーなどの大使との交流の場を設ける。



(3) 効果

- ① 岩手に関心を持つ人数（＝潜在的な岩手ファン）が拡大し、本県の**認知度が高まる**。
- ② 岩手に対する**行動**（来てみる、買ってみる、住んでみる）の**きっかけ**となり、将来的な定住・交流人口の増加等につながる。

(4) 今後の方向性（事業化等）

本プロジェクト提案を反映した事業として、次のとおり平成28年度の予算措置を目指している。

【ふるさとづくり推進事業】

NPOが行う定住・交流事業（移住サポーターのネットワーク構築、先輩移住者と移住希望者によるワークショップ）に対する補助を行う事業であり、**事業の一部にSNS情報発信及び交流会の実施の提案を取り入れたもの**。

【いわて若者活躍支援事業】

首都圏での若者会議を開催することで、若者同士での情報交換・交流を促進する事業であり、**事業の一部にSNS情報発信及び交流会の実施の提案を取り入れたもの**。会議の開催は、いわて若者交流ポータルサイトのSNSを活用することとなる。

「いわて知り合い大使」については事業には組込まれなかったものの、「普通の暮らし」が県外からみると「岩手らしさ」が感じられるような人による情報発信は、上記の事業で行えると考えている。



(5) 参考

「ミレニアル世代（19～25歳）の価値観と旅行に関する調査」

（「株」JTB総合研究所」2014. 11. 11）

《SNSを利用して経験したこと（上位4回答）》

- ① 昔の知り合いとつながって再び交流するようになった（28.9%）
- ② 投稿を見て、行ってみたいと思った場所に出かけた（28.4%）
- ③ SNSで知った情報で、いいと思ったものを購入した（19.9%）
- ④ SNSで知り合った人に会いに出かけた（15.9%）

《まとめ（抜粋）》

情報とミレニアル世代の関係をみると「旅行に行くきっかけ」「旅行先の決定」についてはいずれもどの世代よりも、「友人や家族との会話」「Facebookやtwitterなどの投稿や友人のやりとり」が多い結果となりました。（中略）

ITにせよリアルにせよ、情報過多により自身で選別が難しい時代において、ある程度目利きして、後押ししてほしいニーズがこの世代にはあるかもしれません。

2 “まるっとキャンパス” プロジェクト

(1) 目的

- ① 県内でも自然的・地理的な制約が大きい**県北・沿岸地域の交流人口の増加**を目指し、**県央域から効果的な人の流れをつくりだす**。
- ② インフラ整備以外の手段で**体感移動時間を減らす**ことを目標とする。
- ③ 平成28年に開催される「**希望郷いわて国体・希望郷いわて大会**」の文化プログラムとして**実施**し、来県者への「**おもてなし**」となる取組を行う。

(2) 事業提案内容

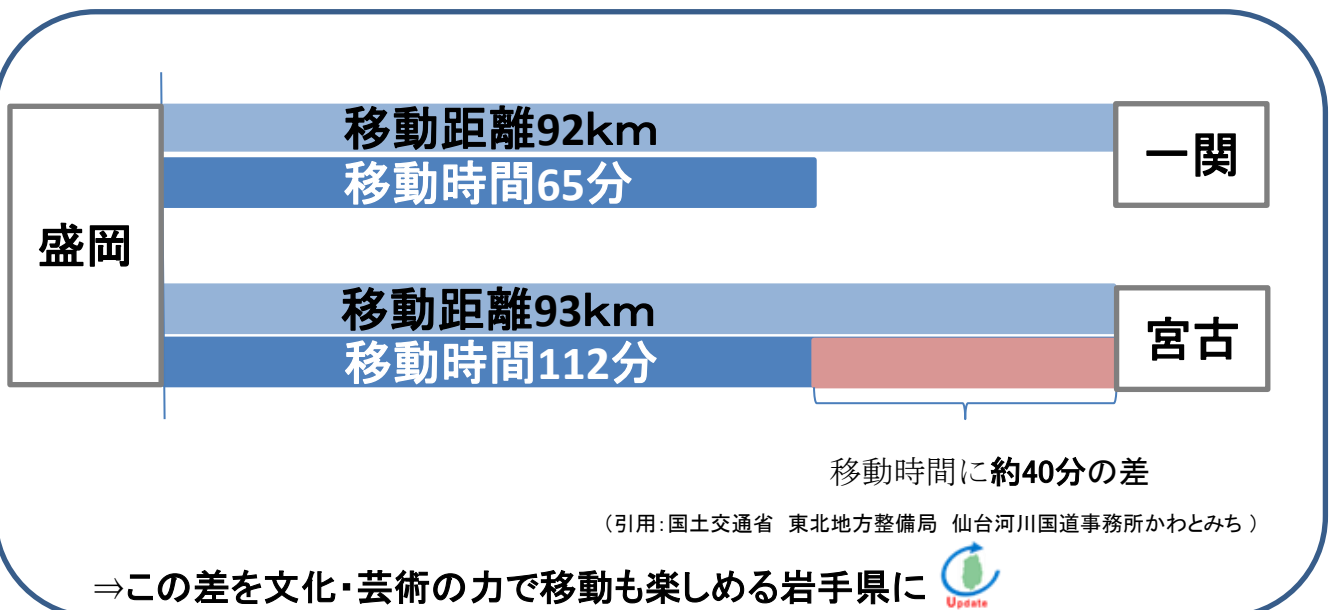
☞ “移動も楽しめる” をコンセプトとした芸術発表の場づくり

① まるっとキャンパス事業

- ・ 県央域から県北沿岸地域へ向かう**主要幹線道路の沿道**をキャンパスに見立て、**文化・芸術の発表の場**を創出する。
- ・ インスタレーション※やプロジェクションマッピングを活用し、見慣れた里山風景をデザインすることで、新たな魅力（価値）を生み出す。
 ※ 場所や空間全体を作品として体験させる芸術手法

② 芸術発表に付随したアーティスト・イン・レジデンス事業

- ・ 沿道沿いの**集落をまるごと文化・芸術の発表の場**とし、**野外等での芸術祭を開催**する。
- ・ 作品の制作過程においては、発表の場となる集落で制作者を受け入れ、本県に滞在しながら制作活動を行い、地域との交流を図る。
- ・ 県外等から新たな人材が地域に入り、住民との交流を図ることで、住民同士の結束力をさらに強め、地域コミュニティ活動の環境を整えることをねらいとする。



(3) 効果

① 観光目的地域の拡大

背景で述べた東西の移動にかかる所要時間に対して、それ自体が楽しめるコンテンツとなる。

② 交流人口の拡大

アーティスト・イン・レジデンスによる制作者の受入や芸術祭の開催等により来県者を増やし、岩手ファンの拡大につなげる。

③ 若手アーティストから選ばれる岩手県

広大なキャンバスを提供することで、首都圏ではできないような芸術作品の制作を可能とし、「岩手に行けば新たな制作活動に取り組める」という若手アーティストの共感を生み、文化・芸術を通じた新たな本県の魅力発信につながる。

(4) 今後の方向性（事業化等）

検討を重ねたが、実際の事業化に向けた内容の具体化、課題のクリアまでには至らなかった。しかし、本プロジェクトが交流人口増加の効果的な手法のひとつとなり得ることを確信しており、今後に向けた長期的なビジョンとして提言するもの。

(5) 参考

- ・ 単行本 大内孝子（2015）「ハッカソンの作り方」ビー・エヌ・エヌ新社
- ・ 雑誌 「月刊 事業構想 8月号」日本ビジネス出版
- ・ 論文
岡本 健（2012）
「情報社会における旅行者の特徴に関する観光社会学的研究」
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士学位論文
- ・ パンフレット
秋田県上小阿仁村（2015）「KAMIKOANIプロジェクト秋田2015ガイドブック」
秋田県観光文化スポーツ部文化振興課（2015）
「あきた県民文化芸術祭2015公式ガイドブック」
上小阿仁村地域おこし協力隊 河原崎彩子（2015）「かみこあに帖」
上小阿仁村産業課
盛岡市・（公財）盛岡観光コンベンション協会（2013）
「歩いて楽しむまち盛岡」
- ・ Web
国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所かわとみち
三陸沿岸道路の整備効果
大阪カンヴァス推進事業（2015）
岩手県庁Ingress活用研究会（2015）
「地域活性化におけるIngressの可能性」岩手県秘書広報室調査監

3 “いわてワーホリ” プロジェクト

(1) 目的

- ① 「岩手に仕事があるのか」「生活スタイルや利便性はどうか」「地域になじめるか」等、移住に不安を抱える**移住希望者**に**本県の魅力**や**住みやすさ**を**体験**してもらうことで、岩手への**移住**を後押しする。
- ② 岩手のできる仕事を通して、**スキルを活用する場の提供**と地域住民との**交流機会**を創出し、**地域の活性化**を図る。

(2) 事業提案内容

- ☞ 移住希望者を対象に、お得な条件で空き家を貸出し、**「岩手のできる仕事」とセットで「お試し居住」を提供**する。

岩手のできる仕事（いわて型ワーク）

- ◆ 仕事体験を提供
- ◆ 日当又は製作費を支給

お試し居住（トライアルステイ）

- ◆ 空き家を低額で賃貸
- ◆ 生活費、光熱水費、通信費、交通費等は自己負担

【仕事メニュー例】

- ① 農家で農業経営を学ぶ（1ヶ月）
- ② 地酒造りを学ぶ（3ヶ月）
- ③ 南部鉄器 or 漆工芸 × ライフスタイル提案（3ヶ月）
 - ・ 日常生活での活用方法の提案と情報発信
- ④ 岩手で自分の店を持ってみよう！（1～3ヶ月）
 - ・ 空き店舗を提供し、期間限定でパン屋等の開業を支援
- ⑤ 廃校活用アートプロジェクト（3ヶ月）
 - ・ アートの力で廃校を魅力的空間にデザイン
 - ・ 地域住民との協働作業により、魅力的な「空間づくり」「地域づくり」を提案

- ◆ 岩手の「仕事」と「暮らし」という「ライフスタイル」を提案。
- ◆ 「岩手らしい仕事」に加え、参加者のクリエイティブなスキルを活用できる仕事の間を提供。
- ◆ 「岩手で実現できること」を見つけるきっかけを提供。

【事業実施の方法】

- ① 実施期間は3年間とする。
- ② 県と希望市町村が連携して実施。企業等にプログラム企画・運営を委託する。

実施年度	実施方法	実施内容
1年目	2市町村との連携によりモデル的に実施	○市町村との調整(2市町村の選定) ○プログラム企画・運営委託 ○モデル実施
2年目	前年度の実施を踏まえ、見直して実施	○見直し事項を反映し、モデル実施(1年目と同じ2市町村で実施)
3年目	他市町村に呼びかけ、県と希望市町村で推進協議会を立ち上げ、実施(推進協議会主催)	○推進協議会設置、実施(対象市町村を拡大) ⇒プログラム拡大

【役割分担】

県	参加市町村	委託業者(不動産会社)
○業務委託契約 ○委託業者との調整 ○参加市町村との調整等	○住宅と仕事の用意(提供) ○地域住民の協力体制の確保 (参加者と地域の交流機会創出等) ○仕事受入先への助成	○全体の企画、運営業務(市町村へのアドバイス) ○参加者募集・情報発信 ○受入住居の整備等 ・家主との協議 ・居住施設として使用する物件の賃貸借契約 ・入居の準備 等

(3) 効果

- ① お試し居住を通して、移住希望者の移住に対する不安を解消することができ、**移住・定住人口の増加**につながる。
- ② 仕事体験を通して、新たな**担い手の確保**や**地域の魅力化**につながる事業を展開することで、**地域活性化と新たな岩手の魅力発信**につながる。

(4) 今後の方向性(事業化等)

本プロジェクトの構想の一部を取り入れた事業として、次のとおり平成28年度の予算措置を目指している。

【ふるさとづくり推進事業費】

移住希望者のモニターツアー(岩手暮らし体験ツアー)の実施により、実際に岩手を体験してもらい、移住の拡大につなげる。

(5) 参考(類似例)

- ・ 福岡県で「ふくおかトライアルワーキングステイ」を実施(H23年度～)
- ・ 実施主体は、県と8市町による「ふくおかトライアルワーキングステイ実行委員会」

4 “Iwate × Connect” プロジェクト

(1) 目的

- ① 市町村と連携して定住施策を行うことで、県外からの移住・定住を促進する。
- ② 市町村の悩みである住居確保について、「空き家活用」により解決を目指す。

(2) 事業提案内容

- ① 市町村と連携した移住・定住対策

モデル事業の実施

移住者の受入体制整備を行うモデル市町村を選定、専門家等による定期的なアドバイスを実施し、対象市町村の課題発見から解決までを一括して行う。

<実施具体例>

4月～5月 対象市町村の公募・選定 (2市町村程度)

5月～6月 アドバイザーの選定・協力依頼

※アドバイザーとは？

選定された市町村に体制づくりの助言を行う者。

その地域で活躍する移住・定住のキーパーソンを中心に
打診する。

6月～ 検討開始

- ・アドバイザーと県の専門員が月1回程度市町村を訪問し指導
- ・専門員は要望に応じて出張相談に応じる

翌年6月 成果発表会の実施

☞ 移住・定住施策に精通した者からアドバイスが受けられる

☞ 各市町村の特徴に合せた解決方法を模索できる

市町村支援

- ・ 連絡会議や研修会等を開催する。
- ・ 担当部署リスト、対応マニュアル、事例データベース等を作成する。
- ・ 市町村担当者の相談窓口として、助言や情報提供を行う。

☞ 市町村間の情報交換を充実させ、受け入れ態勢づくりをサポート

- ② 空き家活用の促進

情報の集約・発信

- ・ 各市町村の空き家物件情報や周辺施設情報等を集約・整理し、ホームページで発信する。
- ・ 発信する情報は、常に最新とする必要があるため、新規物件や契約済みについて、継続的に管理を行う。

☞ 各市町村の情報をひとつに集約



宅建協会等との連携

一般社団法人岩手県宅地建物取引業協会や空き家の貸主と連携し、スムーズに手続きを行えるようにする。

👁️ 問合せ対応時に条件が合えば、即座に契約できる体制を構築

(3) 効果

① 情報の一元化

- ・ 乱立する情報を集約することで、移住・定住希望者が情報を探しやすくなる。
- ・ 県内の情報が集まることから、他市町村の事例を基にしたアドバイスや情報提供を行うことができる。



② 空き家の有効活用

管内での増加が問題となっている空き家を、住居を探す移住・定住希望者とマッチングすることによって活用することができる。

(4) 今後の方向性（事業化等）

本プロジェクトで研究した移住・定住対策は、既存事業とのすみ分けや部局間の役割・連携体制の調整が整わず、事業化には至らなかった。しかし、提案した市町村支援や空き家の活用が、社会情勢の地域事情の変化により市町村担当及び地域に求められていると確信していることから、現在配置されている「定住・交流促進専門員」「定住・交流推進員」にその一助を担っていただくことを提言する。

(5) 参考

市町村担当者アンケートにより寄せられた声

- ・ 県内各市町村の取組情報のとりまとめを行って欲しい。
- ・ 県内の移住・定住の情報をまとめたサイトを設置してほしい。
- ・ 人口対策・空き家対策・担い手対策など、様々な立場で業務を推進していく必要があるため混乱している。
- ・ 空き家バンクの登録物件数が少なく有効に活用されていない。 etc……

出典

「農山漁村に関する世論調査」（内閣府）

<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-nousan/index.html>

（平成27年7月9日に利用）



Ⅲ 7つのプロジェクト

Ⅲ - 2	若者活躍促進	17
1	“若者アクションパートナー（若者AP） × 若者交流ポータルサイトUpdate” プロジェクト	..	18
2	“若者チャンネル × たまり場” プロジェクト	20
3	“SUPER若者文化祭” プロジェクト	22



Ⅲ 7つのプロジェクト

Ⅲ - 2 若者活躍促進



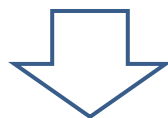
【背景】

岩手県では、若者の活躍支援に資する部局横断的事業や、関連部局の連携・協力体制の構築への取組が、現在進行形で力強く推進されているところです。そして、すべての世代が力を合わせた「希望郷いわて」の実現に向けて、平成26年2月に知事が「若者活躍支援宣言」を行い、県民を挙げた若者支援への方針を明確にしています。

一方で、若者の活躍に繋がる発想や意欲があっても、若者自身が情報の収集・共有機会や相談相手等に必ずしも恵まれているとは言えず、その活動ができない場合もあるのが現状です。また、若者が文化芸術等を主体的に表現する「場」が限られているため、活動支援の機運醸成を図りながら、より多くの成果の発表や交流の機会を創出することも課題の一つと言えます。

【課題意識】

- ・ 若者の**交流促進と情報発信の活性化**
- ・ 意欲と発想を持つ若者への**活動場所の提供**
- ・ 若者の文化芸術活動の**発表機会の拡張**
- ・ 若者のニーズに即した**きめ細やかな支援**



【取組の方向性】

県内外の若者同士を繋ぎ、「面白いことをやりたいなら 岩手でやろう」という熱気を高めていくもの。

1 “若者アクションパートナー（若者AP） × 若者交流ポータルサイトUpdate “プロジェクト

(1) 目的

- ① 県内の活躍する若者、若しくは今後活躍が期待される**若者同士が知り合い、交流する機会を増やす仕組み**をつくる。
 - ② 県内外で活躍している**若者を積極的に発信**することで、**若者の活動に対する県民の認知度を向上**させる。
- ☞ **若者同士が「コミット」するには「つながり」が必要**
- ☞ **若者が活躍しやすい環境を整える**

(2) 事業提案内容

- ① 若者アクションパートナー（若者AP）の創設・活動
若者と関わりたい、協働したいという意欲を持っている若手職員を**若者アクションパートナー**に任命する。

＜若者APの活動内容＞

- ・ 若者とのつながりをつくるために、積極的に若者が主催するイベントや会議などに参加
- ・ 若者にインタビューを行い、結果をレポートとして取りまとめ、県庁内に情報を共有 → 施策等を考えるきっかけづくり
- ・ 「いわてグラフ」、「いわて希望チャンネル」など県広報媒体や、「いわて若者会議」等の県内在住の若者が集うイベントで若者の活躍や取組の情報発信
- ・ 把握した若者の現状の改善やニーズを実現するために、打合せへの参加や行動計画の策定協力、協力者・団体、仲間とのマッチングを行う

- ☞ **若者の現状やニーズ、取組内容を十分に理解したうえで、協働するパートナーとなる**

【実施の流れ（3年）】

1年目は、意欲のある若手職員を選抜して若者APに任命し5月中旬をめどに活動開始する。「現状、ニーズ等の把握等」、「情報発信」の一部（県内在住の若者が集うイベントで若者の活躍や取組の紹介）を行う。

また、下半期は2年目からの本格的な活動に向けて、上半期の活動実績を踏まえ、若者APの体制や「協働」の具体的な内容を検討し、決定する。

2年目は、1年目の下半期で決定した体制により若者APを本格的に実施する。

3年目以降は、前年の活動実績を反映させたブラッシュアップを行い、若者APの活動を継続していく。

② 若者交流ポータルサイトUpdate

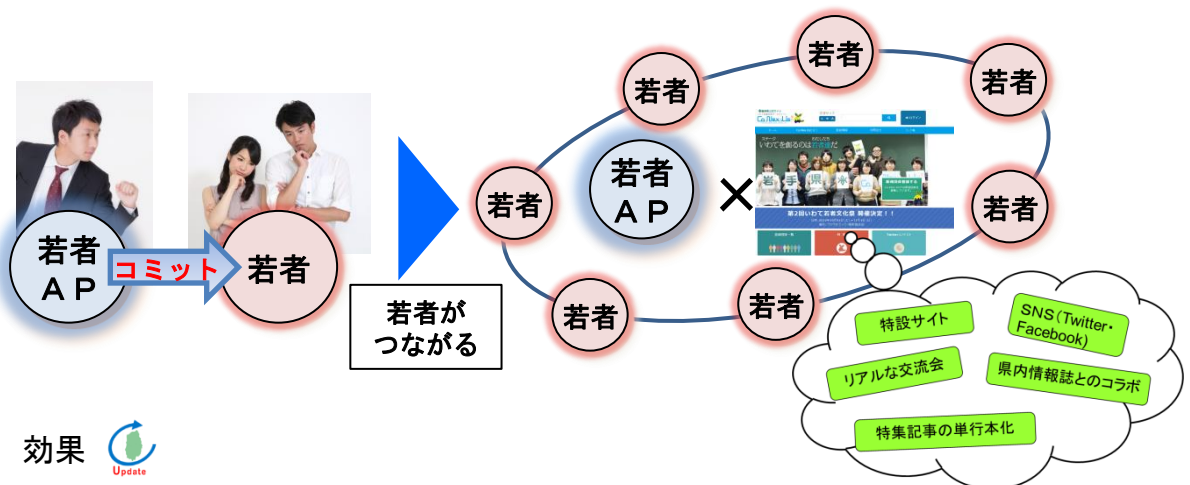
県が活動している若者向けに開設している、いわて若者交流ポータルサイト「Co. Nex. Us (コネクサス)」を、使いやすくなるように変更を加えるとともに、若者の活動を広く知ってもらうために、コネクサスに加え、様々な媒体での情報発信にも取り組み、幅広い年代へ若者活動を知ってもらう。

＜コネクサスUpdateの内容＞

- ・ 若者個人からの情報発信を強化
- ・ 活躍している若者の特集記事の更新頻度を増やしてどんどん紹介
- ・ 若者同士のつながりを深めるオフ会の開催
- ・ 県内情報誌とコラボして、紙媒体の読者にもPR
- ・ 掲載した「活躍している若者」の特集記事を冊子化してPR

☞ 若者活動を可視化して、いろいろな世代にPRすることで、若者活動を応援する機運を醸成

☞ 若者が集う交流機会を増やし、より若者同士が「コミット」できる機会を作る



(3) 効果

- ① 若者同士や世代を超えたネットワークが拡大される。
- ② 若者の活躍が県内外へPRされる。
- ③ 若者と支援機関・団体等のつながりの創出や強化が行われる。
- ④ 若者の活躍が促進される。

(4) 今後の方向性（事業化等）

本プロジェクトの提案内容の一部を取り入れた事業として、次のとおり平成28年度の予算措置を目指している。

【いわて若者活躍支援事業】

若者APを設置して若者とのつながりづくりや交流を促進する。

また、若者APによる若者情報収集結果をいわて若者交流ポータルサイトで紹介し、情報発信の充実化を図る。

2 “若者チャンネル×たまり場” プロジェクト

(1) 目的

- ① 活躍する若者の情報発信・PRを徹底して側面支援することで、岩手へ関心をもつ若者を増やす。
- ② 県内の活躍する若者、若しくは今後活躍が期待される若者同士が知り合い交流する機会を増やし、ネットワーク構築を支援することで、若者の活躍度合いの底上げや全県的な広がりをもつ。

☞ 「今、岩手がおもしろい！」を広く発信する

☞ 若者同士がつながる「機会、場」が不足

(2) 事業提案内容

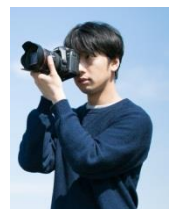
① 若者チャンネル「達増ch. (たそちゃん)」の開設

県公式の24H動画チャンネル（インターネットテレビ等を想定）を開設し、若者の熱気を若者プロデュースのチャンネルで発信する。県が全国に先駆けて配信を開始（平成25年11月）した知事出演の公式ニコニコ生放送のノウハウを生かし、より若者にとって使い勝手の良い、“カタすぎない”新たなメディアとして位置付ける。



「達増ch. (たそちゃん)」

チャンネル登録 321



② たまり場カフェ「コミットいわて」の開設

若者チャンネルの放送スタジオにオープンスペースを併設し、出番を待つ若者が交流できるたまり場とする。岩手に興味を持ち、「コミット」したい若者たちが気軽に集まることのできるカフェをイメージ。



(3) 効果

- ① 若者が自由な情報発信や表現の場を得られる。
- ② 岩手の若者の魅力を県内外へ発信するとともに「おもしろいことをやりたいなら岩手へ行くと良い」という興味喚起を促す。
- ③ 若者同士の交流の場を創出し、活躍度合いの底上げや全県的な拡がりにつなげる。

(4) 今後の方向性（事業化等）

本プロジェクトは、若者活躍促進のための将来ビジョンとして検討したものであり、予算措置を目指す段階へ向けて更なる検討が求められているところである。

また、「1 若者アクションパートナー（若者A P）×若者交流ポータルサイト Updateプロジェクト」において、今後活動を開始することを提案している「若者A P」等を中心に、地域の若者の現状、ニーズ等についての把握が期待される場所であり、これらの知見等も含めた本プロジェクトの充実が必要と考えている。

その上で、事業化に向けた課題抽出と取組内容の精査のプロセスを踏まえるとともに、若者活躍促進の関連事業との効果的な連携を視野に入れながら、提案内容の一層の具体化を図っていくことが今後の課題である。

(5) 参考

- ・ 「DMM.make AKIBA」、「メイカーズムーブメント」
新しいものづくりの場を提案し続ける、フロンティア。競争力の高いものづくり産業の振興のため、県内にも同様の場を創り「ものづくり拠点×若者のたまり場×文化発信拠点」とすることの可能性について探る。
- ・ リノベーション等による“たまり場”創出の流れ
県内でも既にリノベーション等により“たまり場”を創り出す動きがあり、盛岡でも「新しい場所の作り方」と題し、県内の若者がコワーキングスペースや地域との関わりについて語り合うイベントが開催された。県主催（担当：建築住宅課）の「いわてリノベーションシンポジウム」を平成28年1月に開催。既に動き出している若者等も多く、その意見を取り入れることも想定。
- ・ 「岩手IT関連企業若手交流会」（通称：「岩手×IT×若手」会）
大都市圏ばかり注目される、岩手発の「何か」を生み出したい、県内若手エンジニア・クリエイターの底上げをしたい等の思いから生まれた、県内の若手ITエンジニアの交流の（＝“たまり”）場。県ものづくり自動車産業振興課も参加している。

3 “SUPER若者文化祭” プロジェクト

(1) 目的

- ① 『いわて若者文化祭（以下、「若者文化祭」とする。）』への参加機会を増やすことで、さらに多くの若者に活動成果の発表や交流の機会を提供する。
- ② 若者文化の力で『希望郷いわて国体・希望郷いわて大会（以下、「国体・大会」とする。）』を盛り上げることで、岩手の若者文化を発信する。

☞ **若者文化祭の効果のさらなる拡大**

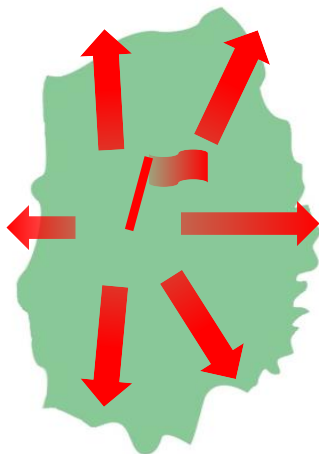
☞ **若者文化と国体・大会を連動させて、ともに盛り上げていく取組の実施**

(2) 事業提案内容

- ① 若者文化祭の県内各地への展開

これまで盛岡市で開催し、県内各地から若者が参加しているところであるが、広大な県土を有する本県においては「参加したいが距離の問題で参加が難しい」若者がまだ存在する状況。

については、多くの若者が参加機会を得られるよう、**若者文化祭の関連イベントを県内各地で開催**する。なお開催にあたっては、地域の若者と連携して実施する。



- ② 「拡張スポーツ」のイベント・展示等の実施

若者文化祭と**国体・大会とのコラボイベント**として、若者文化とスポーツが一つになったイベント・展示等の開催が有効。

については、スポーツとテクノロジー等を融合することで身体能力の差などに関わらず誰もが楽しむことが出来る「拡張スポーツ」のイベント・展示等を**若者文化祭内で実施**する。

(3) 効果

- ① 活動成果を発表し交流する若者が増えることで、若者の活躍が促進される。
- ② 県内外の多様な世代に岩手の**若者を応援する機運が醸成される**。
- ③ 「2020東京オリンピック・パラリンピック」のモデルとなる先駆的な取組として、「拡張スポーツ」イベント等を実施することで、**県民総参加的な国体・大会の盛り上がり**に寄与する。

(4) 今後の方向性（事業化等）

本プロジェクトの提案内容の一部を取り入れた事業として、次のとおり平成28年度の予算措置を目指している。

【若者文化支援事業（H28 一部新規）】

① 若者文化祭の県内各地への展開

県内各地で若者が開催するイベント等を協賛イベントとして位置づけ、**若者文化祭の地域展開**を行う。また、若者文化祭の出演者の派遣も検討する。

② 「拡張スポーツ」のイベント・展示等の実施

宇野氏がシンポジウムのパネリストとして参画するなど、2015年に本格的に検討が始まった「超人スポーツ」等の取組を参考に、若者文化祭において「**拡張スポーツ**」を広く紹介するイベント・展示等を実施する。

実施にあたっては大学等と連携し、岩手の風土・歴史・伝統芸能等を踏まえ、テクノロジーと融合した「**人機一体の新スポーツ**」の開発を検討する。

拡張スポーツの取組例



『バブルジャンパー』

脚部強化器具と衝撃吸収体を身につけ、ダイナミックなハイジャンプアクションを実現。



発展イメージ：『鉄瓶ジャンパー』

(5) 参考

① 超人スポーツは「超人スポーツ協会」が提唱している新たなスポーツで、人間の能力を補強・拡張可能な最新技術に基づいて超人的な能力を身につけることにより、皆が同じ超人同士として一緒のフィールドで競い合う、人間と機械が融合した「人機一体」のスポーツである。

② 国体・大会関連イベントとして、「拡張スポーツ」以外にも「コスプレ」「フィギュア」「ゲーム」などの分野についても検討を行ったが、著作権の関係等のハードルがあり今回は事業化に至らなかった。

大手メーカーと連携したイベントの実施や若者が主催する取組への応援などについて、若者にニーズ等があるかどうかの把握を含め、若者AP等により引き続き検討していただきたい。



IV おわりに

私たち若者世代は、まさに岩手の「未来を創る当事者」だと言えるでしょう。

人口減少、少子高齢化、東日本大震災からの復興・・・。

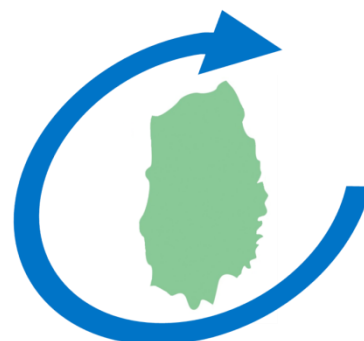
こうした岩手の未来に横たわる様々な課題を解決していくためには、「未来を創る当事者」である若者世代こそが先頭に立って考え、行動に移していかなければならないはずです。

若者のもつ自由な発想力、行動力、チャレンジ精神をもって、よりよい岩手へと変えていく。そのためには、若い世代が思う存分力を発揮し、活躍できる場所が必要であり、若者が生きやすいと感じる岩手県であること。

これが私たち第3期若手ゼミが目指した岩手の姿です。

今回報告した7つのプロジェクトについては、これまでにいただいた多くの方々からのご提言やご助言を可能な限り反映させ、より岩手の実状に即した内容に仕上げることができました。御礼を申し上げます。

最後に、知事・副知事をはじめ関係部局、また、県内外で活躍する多くの方々に貴重な時間を割いてご意見をいただいたことと、私たち第3期若手ゼミ生が岩手の「未来を創る仕事」に少しでも参加させていただけたことに、この場をお借りして感謝を申し上げます。



Update

～若者のチカラで岩手をアップデートする～

1 検討のあゆみ

H27 5. 29(金)	第1回ワークショップ ・ ミッション提示、グループワーク
6. 5(金)	第2回ワークショップ ・ 講義（小野寺環境生活企画室企画課長） ・ 仮グループ編成
6. 11(木)	第3回ワークショップ ・ グループ編成 「きっかけ種まきチーム」 「まるっと岩手チーム」 「Team×Connect」 「Team Planets」 (以後、随時グループワーク)
6. 19(金)	インタビュー 岩手県地域振興室 【Team×Connect】
6. 23(火)	インタビュー 株式会社花巻家守舎 小友 康広氏 【Team Planets】
6. 30(火)	アンケート H27岩手県庁新採用職員 H27岩手県応援職員 【Team×Connect】
7. 2(木)	アンケート 岩手県内市町村 【Team×Connect】
7. 7(火)	インタビュー OSHU LIFE 川島 佳輔氏 【Team Planets】 ガレージホール 二宮 彩乃氏 【Team Planets】
7. 9(木)	第4回ワークショップ ・ 集中ワークショップへ向けた準備 インタビュー ジョブカフェいわて 牛崎 志緒氏 【きっかけ種まきチーム】
7. 14(火)	インタビュー 普代村地域おこし協力隊 鬼東 拓哉氏、谷増 剛氏 【Team×Connect】
7. 16(木) ～17(金)	第5回ワークショップ（集中実施） ・ 知事への中間報告に向けた準備
8. 4(火)	知事への中間報告
8. 5(水)	インタビュー 馬力舎 岩間 敬氏 【Team Planets】
8. 20(木)	インタビュー 釜石市総務企画部総合政策課 まち・ひと・しごと創生室 石井 重成氏 【Team Planets】 釜石地方森林組合 手塚 さや香氏 【Team Planets】
8. 26(水)	第6回ワークショップ ・ 今後のスケジュール確認、部局提案に向けた準備 インタビュー 一般社団法人ランプアップいわて 松嶺 貴幸氏 【Team Planets】

9. 3(木)	インタビュー 滴生舎 鈴木 真樹子氏 田村 良子氏 【Team Planets】 おもてなしの宿おぼない 大建 ももこ氏 【Team Planets】
9. 4(金)	第7回ワークショップ ・ 部局提案に向けて各施策案の掘り下げ
9. 5(土)	インタビュー KAMI KOANI 2015 秋田県上小阿仁村 八木沢集落 水原 聡一郎氏 (上小阿仁村 地域活性化応援隊) 河原崎 彩子氏 (イラストレーター) 【まるっと岩手チーム】
9～10月	事業想定所管部局との事業化等検討
10.31(土)	いわて若者文化祭2015 ・ 「Team Planets」による施策発表
12.14(月)	第8回ワークショップ ・ 事業想定所管部局の予算要求への提案反映状況の確認 ・ 最終報告書の作成について
1.22(金)	第9回ワークショップ ・ 最終報告書の検討
1.29(金)	知事への最終報告
2. 1(月)	子ども・若者施策推進会議 ・ 最終報告書の提出
2.14(日)	いわて若者会議 (研究活動成果をブース出展予定)

2 取材先の記録

研究活動を進めるにあたり、県内各方面で活躍する方々にインタビュー取材を申し込んだところ快く引き受けていただきました。

お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

参考となる貴重なご意見をたくさんいただきましたので、取材内容の一部をご紹介します。

牛崎 志緒(Ushizaki Shio)

ジョブカフェいわて プロジェクトマネージャー

【インタビューの概要】

（UJIターンの推進における課題）

移住を検討なさる方が最も気になるのは、やはり仕事。岩手県として「暮らし」「雰囲気」のよさをPRするのと共に、一人ひとりにあったキャリア支援や情報提供をすることが必要。収入・支出面や車の有無をはじめ様々な確認すべき諸条件があり、（あたりまえだが）移住をスムーズに決められる方が少ない。個人のライフスタイルが岩手でどのように実現するか、具体的にイメージしていただけるかが大切。また、岩手に移住する上での意味付けも、移住の決め手として大きなポイントとなる。

さらに、県と市町村が取り組みの方向性を揃え、部門間や他団体の連携を図ることも重要だと考える。

（UJIターン検討者へのPRの方策について）

岩手の独自産業を知ってもらったり、岩手のキーマン（岩手を楽しんでいる人や先進的な取り組みをしている人）に会ってもらったりすることが考えられる。仕事やプライベートでも岩手と接することを重ねて、最終的に移住してもらおうという段階的なアプローチが望ましいのでは。交流人口の拡大をどうするかということも移住対策には重要なポイント。

以前、東京から県内開催の就職面接会に向かうバスツアーを仕立て、その途中に酒造会社や特色の強い中小企業の見学を組み入れたことがある。その後、参加者には情報提供を継続して行った。何らかのきっかけや切り口を作って、そこから定期的に岩手を訪れてもらえるような仕組みづくりができるよう、その先の関係構築も含めて考えるべき。

自分から情報を取りに行くような意識の高い若者の方は決して多くはない。若者をターゲットにする場合、「ゲーム好き」とか「アウトドア好き」というように様々なターゲットにリーチするPRが必要であると考え。また、若者が岩手に移住して、仕事でキャリアを積みながら、パートナーと出会い、出産し、育児をするなど、長期スパンで自身の将来がイメージできるPRも求められるところと考える。

鬼東 拓哉 (Onizuka Takuya)

地域おこし協力隊 (普代村)



【経歴、活動内容】

宮崎県宮崎市出身。宮崎県内を転々とし22歳の時に上京する。東京ではプログラマー、教育コンテンツ制作会社でシステムエンジニアを経験。その後、宮崎へUターンするが、普代村の地域おこし協力隊に応募。現在は第一次産業をしながら、普代村のホームページ更新作業などを行っている。

【インタビューの概要】

(なぜ普代村を選んだのか)

第一次産業に興味があった。故郷の宮崎県と同じ太平洋側で、寒い場所に住みたいと考え、岩手と青森で場所を探していた。そのとき、普代村のホームページで地域おこし協力隊の募集を見つけ、地域のためにもなると制度を利用した。官公庁のホームページは見づらいものが多い中で、普代村のホームページは見やすかった。

(移住への不安はなかったか)

当初は、排他的なところではないか、地域から疎外されるのではないかと不安だったが、地域の人は自分からあいさつをすると返してくれるし、実際に疎外感を感じたことはあまりなかった。

(移住を考えている人へのアドバイス)

- ・地域から疎外される場合がある。やむを得ず移住先を離れる場合は不満を述べるべきではない（地域にもマイナスになる。）
- ・飲みニケーションを大切にする。飲みたくない（飲めない）人も積極的に地域の輪に入ることが大切。

谷増 剛 (Tanimasu Tsuyoshi)

地域おこし協力隊 (普代村)

【経歴、活動内容】

広島県出身。東京のメーカーに勤務。日本と海外を行き来する生活が長かった。民泊経営をとおして地域おこしをしたいという考えの下、普代村に移住。

【インタビューの概要】

(なぜ普代村を選んだのか)

写真を見て景色がきれいだったので、インスピレーションで決めた。役場の対応がスピーディーで素晴らしかった。

(今後、どのようなサポートを希望するか)

住む場所や仕事、収入面に関しては、1から自分で作ろうと考えていた。それでも、役場のフォローや地域おこし協力隊に任命してもらえたことが非常にありがたかった。

今後、私個人が必要としているサポートは特にはないが、自分のように、自由にやりたいビジョンがある人を後押ししていくような形で、地域おこしを進めていけばよいのではないかと思う。

小友 康広 (Otomo Yasuhiro)

株式会社花巻家守舎 — 住みたい街は自分で作る —

【経歴、活動内容】

岩手県花巻市出身。東京でIT企業に就職し、籍を置いたまま、30歳で実家の木材店も承継。2015年4月には、花巻市にてリノベーションまちづくりを行う「株式会社花巻家守舎」を設立。2015年11月22日にはリノベーションした自社ビルのオープンイベントを開催するなど、魅力的な地域づくりを推進中。



【インタビューの概要】

（地域で若者が活躍するために必要なことは何か）

『みんなでやればなんとかなる』というのは旧世代の価値観。今は「尖る」「突き抜ける」のが大事なので『何かやるなら1人 or 少人数』が良い。

そのような人たちがもっとやりやすい環境を作ってあげたい。

年齢も場所も関係無く「自分が動けば世界は変わる」ということを身近な誰かが見せればいい。

（地域をどのように変えていきたいか）

「地域を良くしたい」という意識よりも「魅力的な人を集めたい」と思っている。結局、地域の魅力は「どんな価値観を持った人が集積しているか」で決まると思っている。そのために、リノベーションまちづくりを通じて『チャレンジすることが楽しい・重要』という価値観を持った人を集め、商売しやすい環境を作っていこうとしている。

川島 佳輔 (Kawashima Keisuke)

OSHU LIFE — 住みたい街、帰りたい地元づくり —

【経歴、活動内容】

岩手県奥州市出身。地元の工場に就職後、3年で退職し、21歳のときに世界一周の旅に出る。旅行中に写真を撮るなかで、クリエイティブな仕事に興味を持つようになる。現在は、Webマガジン「OSHU LIFE」の運営や企業のHPの管理等を行いながら、インターネットを通じて個人からの仕事の依頼を受けるなど、フリーランスとして活躍している。



【インタビューの概要】

（地元で足りないと感じたことは何か）

世界一周の旅から帰国して思ったのが、友達と集まる場所がないこと。だから、何かやろうとした時に、発信できる場が欲しいと思い、インターネットから始めた。

地元を取上げるWebマガジン「OSHU LIFE」を立ち上げたのは、地元の静けさが気になったからもある。「OSHU LIFE」を通じて地元を盛り上げていきたい。

（今後の活動について）

今は空家の古民家をリノベーションして上手く活用し、若者が集まるリアルな空間を作りたい。

この取組は、地方創生を意識していない。まずは自分の周りから楽しくなっていけばいい。その結果、最終的に周りの人も楽しくなればいい。

二宮 彩乃 (Ninomiya Ayano)

いちのせきのはこ ガレージホール — 演劇と人が創る新たな可能性 —

【経歴、活動内容】

岩手県一関市出身。大学卒業後、東京で演劇を勉強し、演出家兼パフォーマーとして活躍するなかで、東日本大震災津波が発生。2012年にUターンし、2014年には劇場「ガレージホール」を開設。現在は地元の中学校で演劇ワークショップを実施するほか、一関地方などに伝わる南部神楽の伝承活動も行っている。



【インタビューの概要】

(二宮氏にとっての演劇とは何か)

多くの人に問題意識を持ってもらうための手段のひとつ。演劇は物事を多角的に見てもらうことができる。

ガレージホールは「人がつながる場所」「縁が集まる場所」というイメージ。演劇を通じて一関の街と仲良くなれるし、地域の人たちと連携がとれていくのも面白い。

(一関にUターンして感じたことは何か)

震災後、演劇を使って自分にできることがはっきりしたら一関に戻ろうと思っていた。人・街ごと育ていける場所を作りたいと思った。

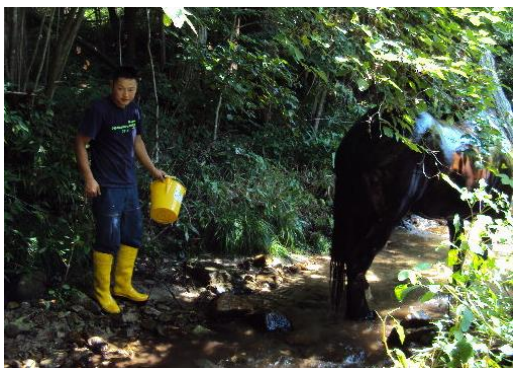
一関の文化の土壌はすごく豊かなのに、面白いコンテンツを発掘したり、発信している人がこれまで少なかった。一関の面白さを拾い上げてプロデュースする役割を担っていけたら。

岩間 敬 (Iwama Takashi)

馬力舎 — 面白いものを手に入れるなら岩手 —

【経歴、活動内容】

岩手県遠野市出身。地元の高校卒業後、東京の専門学校に通いながら乗馬クラブのバイトをしていた際に、馬でオリンピックに出たいと思ったUターン。馬を使った林業を行いながら、地域の伝統技術である馬搬の伝承、宣伝、普及に取り組んでいる。現在は、馬糞を肥料にした「馬米（うまい）」の開発や、馬糞をイメージした木のストラップの商品化に取り組んでいる。



【インタビューの概要】

(Uターンのきっかけは何か)

面白いもの（馬）を手に入れるには、どこに行けばいいのかと考えたときに、岩手ならできると気がついた。馬はお金がかかるから、東京で馬のオーナーになるには40年かかるけど、岩手なら20年でできる。

(馬の魅力、岩手の魅力とは何か)

機械を使って林業をすると、機械が通る道を作らなきゃいけないから、山の見た目が悪くなるけど、馬なら山に入っても痕跡が残らない。馬搬とか、昔から行われてきたことは理にかなっている。人間は草をエネルギーにすることはできないけれど、馬はできる。馬を介して草を人のエネルギーにできる。

岩手にはすごくいいものがあるのに、それには値段がついていないし、多くの人はその価値に気がついていない。

石井 重成 (Ishii Kazunori)

**釜石市 総務企画部 総合政策課
まち・ひと・しごと創生室**
— 今、ここになくてどこにいるんだ —



【経歴、活動内容】

愛知県西尾市出身。大学卒業後、コンサルティング会社でBPR（業務改善）を担当。東日本最震災をきっかけに釜石市に移住し、釜石市役所復興推進本部に勤務。その後、釜石市の復興支援組織「釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）」を立ち上げ、釜石市の復興と地方創生に取り組んでいる。

【インタビューの概要】

（釜石に移住して感じたことは何か）

三陸と東京とでは、直面している困難の大きさと肌感覚が違う。今、被災地になくてどこにいるんだ、という思いで釜石市へ移住した。

自分が入って釜石が一番変わったと思うことは、“（外部人材や変化に対して）開かれている”というまちの空気感。外から来た人に活躍してもらう機会を提供し、地域内外の交流や協働によって新たな付加価値を生み出す、という小さな成功体験を積み上げることができた。

（岩手の強みとは何か）

市民活動にしても、ビジネスにしても地域内の“競争”が少ないこと。新しい事業を起こすときに大切なのは、0から0.3に至る着想であり、実践知の共有。東京の本質的な優位性とは、人的交流によって生まれる情報価値であり、復興プロセスを通じて育まれた、多様な社会関係資本が大きな資産となっていくと思う。

手塚 さや香 (Tezuka Sayaka)

**釜石地方森林組合
（釜石リージョナルコーディネーター）**
— 自分が必要とされる地域で働く —



【経歴、活動内容】

埼玉県さいたま市出身。大学卒業後、全国紙の新聞記者として大阪本社に勤務していた2011年、東日本大震災津波が発生し、取材やボランティアで岩手を訪れるようになる。2014年に新聞社を退社し、現在は、釜石リージョナルコーディネーターとして釜石地方森林組合に勤務し、林業体験や移住促進に取り組んでいる。

【インタビューの概要】

（釜石地方森林組合に就職したきっかけは何か）

震災後、長期的に岩手に関わることを考えていて、その中でも1次産業に興味を持ち、釜石リージョナルコーディネーターに応募した。

釜石は山と海の距離が近く、東京や大阪とは違う、岩手での暮らしがいいなと思った。書く仕事は一人でもできるけれど、自分が必要とされるのはこの地域かなと思った。

（釜石地方森林組合での取組内容は）

外部から人材を受け入れることで交流人口の拡大にもつながることから、インターンシップの受け入れを積極的に行っている。2016年度人材育成事業の一環で、合宿形式で首都圏などからの若い人たちが林業の基礎を学ぶ取り組みを実施する。

人口減少が進むなかで、林業を釜石の産業としてしっかり発展させていきたい。

松嶺 貴幸 (Matsumine Takayuki)

アーティスト

— 東北から世界にアートコンテンツを発信 —

【経歴、活動内容】

岩手県雫石町出身。高校生の時、スキー練習中の事故により四肢麻痺となり、その後のアメリカ留学をきっかけに、マウスペインティングを始める。現在は、著名ミュージシャンやスポーツ選手・企業のポートレートアートを手がける。

クールバリアフリー普及プロジェクト「一般社団法人ランプアップ JAPAN」代表理事。

※ 参照：<http://takayuki-m.com> (アーティストTAKAの公式ウェブサイト)

<https://www.facebook.com/Rampupiwate/> (ランプアップJAPANのFacebookページ)

【インタビューの概要】

(マウスペインティングを始めたきっかけは)

アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルスに留学中にジョニー・アレクソン氏と出会い、マウスペインティングを始めた。障がい者スポーツでは、健常者とステージが違うので、肩を並べられないと感じていたため、アートならと思った。

(松嶺氏にとってアートとは)

自分自身に謙虚でいることは良いが、自分の目指しているものに謙虚はダメ。それを仕事にしたいと思っているならなおさら。私のアートは世界中と東北を繋げるもの。

(岩手からの発信について)

これからは東京を経由せず、東北発信で世界と繋がっていきたい。アートにミュージック、クリエイティブなコンテンツをつくりあげて岩手や東北から世界に発信する。岩手には手先が器用だったり、深い思考の人材が多い。あとは自信を持って発信していく事だと思う。



鈴木 真樹子(Suzuki Makiko)・田村 良子(Tamura Ryoko)

滴生舎

— この土地だからできる仕事を、
この土地の人がしたいと思えることが大切 —



【経歴、活動内容】

鈴木 真樹子

新潟県出身。山形県の美術大学で漆芸を専攻し、学生のとときに滴生舎と出会う。卒業後も漆に関わり続けていきたいと思い、滴生舎に就職。

田村 良子

岩手県二戸市出身。漆については全くの初心者だったが、地元でやりたいことができると思い、20代後半に滴生舎に転職。

【インタビューの概要】

(滴生舎での業務内容は)

滴生舎では二戸市の非常勤職員という身分のため、日中は職員で分業しながら滴生舎の商品を作成・販売している。勤務が終了した夕方4時以降、オリジナルの作品を作っている。

(漆文化の継承についてどのように考えているか)

子供たちには漆が仕事になるという発想がない。だからやりたいと思う人も少ない。地元の子供たちに、仕事としての漆に興味を持ってほしい。

外から言われると漆はいいものだと思うけれど、地元にも漆器の良さを伝えていきたい。

漆文化の継承という感じではなく、漆を生活の中に溶け込ませるにはどうするか、ここにあるものを生活に生かしていくにはどうするか、という視点で考えている。

大建 ももこ(Oodate Momoko)

おもてなしの宿 おぼない
—喜んでもらえるのが嬉しくて—

【経歴、活動内容】

青森県十和田市出身。高校卒業後、青森県内の広告代理店に勤務。仕事の中で温泉郷の特集を組んだことがきっかけで、金田一温泉郷に縁ができ、旅館の若女将となる。現在は、若女将としてのおもてなしのほか、人気漫画を活用した地域おこしにも取り組んでいる。



【インタビューの概要】

(旅館の若女将として取り組んでいることは何か)

金田一温泉郷は50代以上の男性客が中心だったが、2015年の1月頃から、若い女性客が増えてきた。詳しくお話を伺うと、人気漫画の影響とわかったため、アニメのDVDを見るなど勉強した。

キャラクターグッズを客室に1つ置いたら、ファンの人が本当に喜んでくれて、「こんなに喜んでもらえるなら」という嬉しさからグッズをどんどん増やしてきた。

(漫画による地域おこしについて)

漫画による地域おこしは、最初は周囲から理解してもらえなかった。「ばかっこだべ」と言われることもあったが、周囲を説得しながら続けてきた。

今は温泉郷内で漫画を活用した地域おこしは好意的に受け入れられていて、温泉活性化運営委員会が主催となったイベントも開催した。

3 参加イベント

～いわて若者文化祭2015～

平成27年10月31日（土）～11月1日（日）の2日間、プラザおでつて・肴町商店街・ななっく（盛岡市）において「いわて若者文化祭2015」が開催されました。31日には、知事と宇野常寛氏による対談「コミットしたくなる岩手にUpdate作戦会議」が行われ、Team Planetsも岩手を若者の力で盛り上げる「作戦」を提案しました。

検討を重ねてきたプロジェクトを、若手評論家である宇野氏、知事、そして作戦会議に参加している一般のお客様に提案し、アドバイスをいただける絶好の機会。緊張しながらも、岩手を若者の力で盛り上げていきたいと考えるチームの思いとともに、プロジェクトを提案しました。



「若者アクションパートナー」については、宇野氏も「絶対にやった方がいい」と強く肯定され、若者が起業するうえで税金や登記などの事務がハードルとなっていること、そこを支援することは非常に重要であること、そしてやるなら制度として整備し、継続していくことが必要であるとアドバイスをいただきました。

一方、若者交流ポータルサイト「Co.Nex.Us（コネクサス）」更にアップデートさせる作戦については、サイトを誰に見てもらいたいのか、誰を巻き込みたいのか、サイトの位置づけも含めて明確にするよう厳しいご意見がありました。

「たそch」については、都市部にいる人も巻き込み「全国に負けない内容にすること」。たまり場カフェ「コミットいわて」については、常に誰かがいるたまり場になれば、人も情報もどんどん集まり、何かが生まれていく場所になっていくのではないかと今後の展開につながるアドバイスをいただきました。



また、作戦会議の冒頭で行われた宇野氏による基調講演では、これまでの地方での経験を踏まえて「地方ならではのクリエイティブを伸ばす、という発想でなければ絶対負ける」という強いメッセージがありました。

そして、地方にいたることがアドバンテージになるための手法として、「場を創ること。これから何かおもしろいことをしよう、と思っている人たちのシーンを意識的に創っていくことが必要なのではないか。それができるのであれば若者にとって強い希望になる」というTeam Planetsのプロジェクトにも通じるようなご提案をいただきました。

宇野氏、知事、会場の皆様からプロジェクトについて具体的なご意見、アドバイスをいただくとともに、宇野氏からは「全国の中で岩手が若者にとって魅力的な場所になるために何をすべきか？」という視点でもアドバイスをいただき、Team Planetsにとって非常に有意義な作戦会議となりました。

4 平成27年度庁内若手職員による若者施策研究会設置要領

(目的)

第1 この要領は、庁内若手職員による若者施策研究会（以下「若手ゼミ」という。）を設置することにより、若手職員の感性を活かし、「若者が主役になって躍動するいわて」の実現に向けた施策（以下「若者施策等」という。）について部局横断で研究活動を行い、県の施策展開に資することを目的とする。

(研究活動)

第2 若手ゼミは、若者施策等に係る具体的取組について次の研究活動を行う。

- (1) 新規施策等の提案・提言活動
- (2) 提案・提言を踏まえた実践活動

(構成員)

第3 知事は、本庁各部局長等の長、広域振興局長、広域振興局以外の出先機関の長、医療局長及び企業局長並びに議会、監査委員及び各委員会の事務局（警察本部を除く。）の長（以下「各部局長等」という。）により推薦された候補者の中から、概ね20人以内を基本として若手ゼミの構成員（以下「第3期ゼミ生」という。）を指名する。

- 2 各部局長等は、第1に規定する目的に照らし、次の点に留意して第3期ゼミ生の候補者を推薦するものとする。
 - (1) 対象は若手職員（概ね40歳まで）とすること。
 - (2) 対象職員の希望状況、業務内容、経験年数、必要性等を勘案すること。（できるだけ、新規事業立案等の経験がある職員が含まれることが望ましい。）
 - (3) 男女比を考慮するとともに、候補者が複数となる場合は推薦順位を付すこと。
- 3 研究活動等において第3期ゼミ生以外の職員（平成25年度及び平成26年度の若手ゼミに参加した職員等）の参画が必要な場合、知事は、各部局長等と協議の上、助言・サポート等の協力を依頼する。

(服務)

第4 若手ゼミの研究活動は、各部局長等の指示を受け、第3期ゼミ生の所属等が特に命ずる業務として行う。

- 2 第3期ゼミ生の服務上の取扱い（勤務時間、旅行命令等）は、原則として岩手県職員研修規程第6条に規定する能力開発研修に準ずるものとし、必用な範囲において就業時間内にワークショップ、ベンチマーキング、実践活動等を実施する。
- 3 第3第3項の規定により第3期ゼミ生以外の職員が研究活動に参画する場合は、前2項の規定に準じて取り扱うものとする。

(事務局)

第5 若手ゼミの事務局は、環境生活部若者女性協働推進室が担う。

(その他)

第6 この要領に定めるもののほか、若手ゼミの設置に関し必要な事項は、環境生活部長が定める。

5 平成27年度 庁内若手職員による若者施策研究会 (第3期若手ゼミ) メンバー

【 きっかけ種まきチーム 】

部局	所属	職	氏名
総務部	税務課	主事	及川 源太郎
保健福祉部	健康国保課	技師	菊池 裕美
商工労働観光部	企業立地推進課	主任	山本 和広
盛岡広域振興局	経営企画部	主事	菊池 冴美

(事務局) 若者女性協働推進室主任 鈴木 あゆみ

【 まるっと岩手チーム 】

部局	所属	職	氏名
保健福祉部	医療政策室	主査	糠森 教雄
農林水産部	水産振興課	主事	佐藤 敬之
教育委員会事務局	教職員課	主事	刈屋 江美子

(事務局) 若者女性協働推進室特命課長 小田島 高志

【 Team×Connect 】

部局	所属	職	氏名
環境生活部	県民くらしの安全課	主事	佐藤 温美
農林水産部	農村計画課	主任	鈴木 昭和
県土整備部	県土整備企画室	主事	高前田 和平
教育委員会事務局	生涯学習文化課	主事	中島 真

(事務局) 若者女性協働推進室特命課長 寺澤 敬行

【 Team Planets 】

部局	所属	職	氏名
総務部	人事課	主事	古川 恵
政策地域部	科学ILC推進室	主任	藤井 公博
環境生活部	環境保全課	主任	篠木 勝利
環境生活部	廃棄物特別対策室	主任	畠山 敦
商工労働観光部	産業経済交流課	主事	高橋 花奈
農林水産部	農業振興課	主任	佐藤 武博
県土整備部	建築住宅課	主事	山本 仁美
復興局	産業再生課	主査	内田 康介

(事務局) 若者女性協働推進室主査 兼平 俊亮